

The Forms and Syntax of Verbs
in the Early Modern English and
Late Modern English Periods

初期近代英語期及び後期近代英語期における
動詞の語形と文法

(要 旨) 改訂版 2015 年 3 月 2 日

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期 英語学専攻
学生番号：D 1 0 2 4 7 0
氏 名：原 口 行 雄

要 旨

本論文は、直説法現在時制 3 人称単数形動詞活用語尾 *-(e)th* 形と *-(e)s* 形の発達と連続して起こる二つの出来事あるいは二つの行為について述べる際に用いられる「時の副詞節」を導く接続詞的機能語句の発達を扱います。以上の二つのテーマには互いに関連する事項は乏しいですが、両者は初期近代英語期初頭にそれぞれ競合する項目が現れて発達を続け、最終的に概ね 18 世紀末までにはそれぞれ競合相手を駆逐し、現代英語へと繋がって行ったと想定される共通点を有するものです。言い換えると、両者は発達の時期と最終的交代の時期がほぼ同一であるということです。この共通点を基に二つのテーマの発達の歴史を書き言葉による資料を用いて、この仮説を検証するのがこの研究の目的です。

そこで、直説法現在時制 3 人称単数形活用語尾の発達を、第 1 章から 4 章にわたって論じています。一方、接続詞的機能語句の発達は、第 5 章から 7 章にわたって論じています。

第 1 章では、直説法現在時制 3 人称単数形動詞活用語尾の初期近代英語期までの発達の歴史をカーム (George O. Curme) の記述を基に概説しています。主語名詞句と述部動詞との数の一致の規則は初期近代英語期頃までは必ずしもきちんと守られていたわけではないことを、例を挙げて説明しています。さらに、接続詞 *if* や *unless* で始まる条件節や *although* や *though* で始まる譲歩節では、述部動詞は仮定法現在形を取り、3 人称単数形でも活用語尾を伴わず、*zero form* を取ることを Shakespeare の例を挙げて説明しています。

第 2 章から直接法単純現在時制 3 人称単数形動詞活用語尾の歴史的発達の記述が始まります。テキストを 10 種類のテキストタイプ (The Bible; biography; drama; essays; fiction; journals & reports; letters, diaries & memoirs; linguistics; official documents; and poetry) に分類しています。この章では drama を除いた 9 種類のテキストタイプ別の初期近代英語期から後期近代英語期 18 世紀までの発達の流れについて記述しています。3 人称単数形動詞は、*-(e)th* 形のみを取るもの、*-(e)th* 形と *-(e)s* 形の両方を取るもの、*-(e)s* 形のみを取るものの 3 種類に分かれます。16 世紀前半から 17 世紀前半までは、概ね *-(e)th* 形のみを取るものが優勢です。それでも、16 世紀後半には poetry では *-(e)s* 形のみを取るものが 60% を占めてきます。次に、17 世紀前半に biography、official documents と poetry では *-(e)s* 形のみを取るものが 60% から 90% を占めてきます。17 世紀後半になると、終

に biography、essays、fiction、letters/diaries/memoirs、linguistics、official documents と poetry の全てで *-(e)s* 形のみを取るものが 60% から 100% を占め、*-(e)th* 形に代わって優勢になってきます。さらに、18 世紀前半には、biography、essays、fiction、journals & reports、letters、official documents と poetry の全てで *-(e)s* 形のみを取るものが 90% から 100% を占め、一層優勢になっています。18 世紀後半でも、*-(e)s* 形の優勢は継続し、biography、essays、fiction、journals & reports、letters、linguistics、official documents と poetry の全てで *-(e)s* 形のみを取るものが 95% から 100% を占めてきます。従って、*-(e)th* 形が *-(e)s* 形に取って代わられる時期は 18 世紀中のある時期、遅くとも 18 世紀末であると言っても過言ではないでしょう。

第 3 章では、Shakespeare を除く drama を資料として、3 人称単数形動詞活用語尾の歴史的発達を論じています。同様に、3 人称単数形動詞を *-(e)th* 形のみを取るもの、*-(e)th* 形と *-(e)s* 形の両方を取るもの、*-(e)s* 形のみを取るものの 3 種類に分けて調査しています。16 世紀前半には宗教劇を除いて drama は少ないので 16 世紀後半から 18 世紀末までを調査対象にしています。Drama では、16 世紀後半に *-(e)s* 形のみ取るものが 71% を占め、*-(e)s* 形の *-(e)th* 形に対する優勢が始まっています。17 世紀前半には、*-(e)s* 形の優勢が一層増し 96.5% にまで達しています。17 世紀後半には 99.6% にまで達します。18 世紀前半には *-(e)s* 形のみを取るものが終に 100% に到達します。18 世紀後半も類似の状況が続いています。従って、drama では *-(e)th* 形が *-(e)s* 形に取って代わられる時期は 17 世紀末、遅くとも 18 世紀前半だと云えるでしょう。

第 4 章では、助動詞用法と本動詞用法の二つの用法を持つ *doth vs. does* と *hath vs. has* の歴史的発達について論じています。*Doth* と *does* の助動詞用法には、否定文や疑問文等を作る *do-support*、強意用法や *doth/does* + 動詞の基本形で表す *do-periphrasis*、動詞句の反復を避ける *pro-verb* の 3 通りがあります。本動詞用法では、*doth* と *does* は「お元気ですか」の意味や、「害を及ぼすとか利益をもたらす」という意味で使われます。一方、*hath* と *has* の助動詞用法とは過去分詞を伴って現在完了相を作るものです。本動詞用法では「所有する」の意味で用います。

第 1 節では、Shakespeare 劇を題材にしています。*Doth* と *does* の助動詞用法としては、両方の合計が一番多い *do-periphrasis* 用法の場合、喜劇で 243 回、歴史劇で 204 回、悲劇で 206 回、ロマンス劇で 59 回 となっています。次に多い *do-support* 用法の場合、喜劇で 61 回、歴史劇で 58 回、悲劇で 59 回、ロマンス劇で 14 回 となっています。*pro-verb* 用法の場合、喜

劇で 33 回、歴史劇で 44 回、悲劇で 37 回、ロマンス劇で 27 回となっています。Doth と does の動詞用法の場合、その使用回数は pro-verb のそれに近い数値を示しています。喜劇で 43 回、歴史劇で 33 回、悲劇で 46 回、ロマンス劇で 12 回となっています。Doth と does との使用回数を比較した場合には、17 世紀に書かれた劇では does の使用回数の方が多く、その点が喜劇 (67.4%) と悲劇 (87%) とロマンス劇 (83.3%) の使用頻度に反映されています。

現在完了相を作る場合、喜劇 (91.3%)、歴史劇 (91.4%)、悲劇 (85.5%)、ロマンス劇 (83.1%) と全てで hath の使用頻度が高くなっています。本動詞用法でも、喜劇 (80.8%)、歴史劇 (84.2%)、悲劇 (58.9%)、ロマンス劇 (59.2%) と hath の使用頻度が高くなっています。

第 2 節では演劇を除く 9 種類のタイプのテキストを題材にしています。助動詞用法では、16 世紀前半から 17 世紀前半までは概ねすべてのテキストタイプで専ら doth が使用されています。17 世紀後半には does が散発的に現れ、優勢になる時期は用法によって異なり、18 世紀前半か 18 世紀後半です。本動詞用法では、16 世紀前半から 17 世紀後半までは doth が一般的であり、does は 18 世紀前半から登場し、18 世紀後半に doth に取って代わります。Do-support 用法は別にして、17 世紀前半頃までは出現数が多いのですが、その後次第に減少していきます。Do-support 用法は、16 世紀後半の 69 回は別にして、18 世紀には 72 回、217 回と増加していきます。現在完了相を作る用法では、17 世紀前半までは hath の使用が優勢です。17 世紀後半から has の使用が増え始め、18 世紀前半に漸く hath を凌駕し、18 世紀後半に has の優勢が確立します。本動詞用法でも、17 世紀前半までは hath の使用が優勢です。17 世紀後半から has の使用が増え始め、18 世紀後半に has の優勢が確立します。

第 3 節の Shakespeare 以外の劇作品の場合、17 世紀前半あるいは 17 世紀後半までは do-periphrasis 用法でも、pro-verb 用法でも、本動詞用法でも doth の出現数が多いのですが、その後激減していきます。Do-support 用法でも 17 世紀後半の出現数に比べて、その後はやや減少しますが、減少数は小さいです。すべての用法で 18 世紀前半までは、概ね doth が優勢です。Does の優勢が確立するのは 18 世紀後半です。現在完了相を作る用法では 17 世紀前半までは hath が優勢です。17 世紀前半から has の出現数が増加し、18 世紀後半に has の優勢が確立します。本動詞用法でも、17 世紀前半から has の出現数が増加し、18 世紀後半に has の優勢が確立します。

第 5 章では、「～するとすぐに」の意味で「二つの出来事ないしは行為

が連続して起きる時の副詞節を導く接続詞的機能語句の発達」を扱っています。資料として、15世紀後半から19世紀前半までの散文テキストを使用しています。各接続詞的機能語句（以下、接続語句と略称）の用法、*as soon as* vs. *so soon as* 及び *no sooner...but* vs. *no sooner...than* の競合関係、主節と従属節における述部動詞の時制と接続語句との共起関係、接続語句の異形、否定語（*no sooner*、*scarce(ly)*や*hardly*等）が節や文の先頭に來て生じる倒置の有無、*as soon as* や *so soon as* や *as fast as* が同等比較表現の副詞句や *one can* や *possible* 等を伴って強意副詞として機能することについて述べています。

15世紀後期では、*anone as* と *as sone as* が、16世紀前半では、*as soon as*、*as soon as ever*、*anon as*、*no sooner...but*、*scarce...than* が用いられています。16世紀後半では、*as soon as*、*as soon as ever*、*so soon as*、*as fast as*、*no sooner...but*、*no sooner...but that*、*no sooner...than*、*scarce...before*、*scarce...but*、*scarce...but that*、*scarce...ere*、*scarce...when*、*scarcely...before*、*scarcely...but that*、*scarcely...when* が、17世紀前半では、*as soon as*、*as soon as ever*、*so soon as*、*no sooner...but*、*no sooner...than*、*scarce...that* が、17世紀後半では、*as soon as*、*so soon as*、*as fast as*、*no sooner...but*、*no sooner...than*、*no sooner...when*、*scarce...when*、*scarce...before*、*scarce...but*、*scarcely...when*、*scarcely...before*、*hardly...when*、*hardly...e're* が、18世紀前半では、*as soon as*、*as fast as*、*no sooner...but*、*no sooner...than*、*scarce...when*、*scarce...before*、*scarce...but*、*hardly...when*、*hardly...before*、*the moment*、*the instant* が、18世紀後半では、*as soon as*、*so soon as*、*as fast as*、*soon as*、*no sooner...but*、*no sooner...than*、*scarce...when*、*scarce...before*、*scarcely...when*、*scarcely...before*、*scarcely...ere*、*scarcely...than*、*hardly...when*、*the moment*、*the moment that*、*the instant*、*the instant that*、*the minute* が、19世紀前半では、*as soon as*、*so soon as*、*as fast as*、*soon as*、*no sooner...than*、*scarce...when*、*scarce...before*、*scarcely...when*、*scarcely...before*、*scarcely...ere*、*scarcely...than*、*hardly...when*、*hardly...before*、*barely...when*、*the moment*、*the instant*、*the minute*、*directly* が使用されています。

As soon as vs. *so soon as* の競合関係は16世紀後半（109回対31回）に始まり、19世紀前半（170回対8回）に終わります。*No sooner...but* vs. *no sooner...than* の競合関係は17世紀後半（62回対19回）に始まり、18世紀後半（3回対136回）に終わります。

主節と従属節における述部動詞の時制と接続語句との共起関係では、主節

の動詞が過去時制で、従属節の動詞が過去時制という組合せと、主節の動詞が過去完了で、従属節の動詞が過去時制という組合せが多くなっています。

接続語句の異形は各時期に現れるものの内、下線を施したものがそれにあたります。

The *no sooner* group、the *scarce* group、the *scarcely* group、the *hardly* group における倒置の有無については、倒置が多い例としては、17 世紀前半の *no sooner...but* (12 out of 33)、17 世紀後半の *scarce...when* (3 out of 6) 18 世紀前半の *no sooner...but* (9 out of 35)、18 世紀後半の *no sooner...than* (50 out of 136)、*scarcely...when*(7 out of 26)、19 世紀前半の *no sooner...than* (22 out of 41)、*scarcely...before* (3 out of 6)、*hardly...when* (3 out of 8) です。

As soon as や *as fast as* 等が接続語句ではなくて、同等比較表現としての例は、16 世紀後半、17 世紀後半、18 世紀前半、18 世紀後半、19 世紀前半に見られます。一方、*as soon as one can* や *as fast as possible* 等の表現で強意副詞としての例は、16 世紀後半、17 世紀後半、18 世紀前半、18 世紀後半、19 世紀前半に見られます。

第 6 章では、劇における接続語句について考察しています。先ず、Shakespeare 劇では *so soon as*、*so soon as ever*、*as soon as*、*as fast as*、*no sooner...but*、*no sooner...than* の 6 種類が使用されています。一方、Shakespeare 以外の劇では、*as soon as*、*as soon as ever*、*so soon as*、*as fast as*、*no sooner...but*、*no sooner...than*、*scarce...but*、*scarce...when*、*scarcely...but*、*scarcely...when*、*the moment*、*the instant* の 12 種類が使われています。このように種類に違いが生じている主な理由は、Shakespeare 以前の時代のみ現れるものと Shakespeare 以後の時代に登場するものがあるからです。

第 7 章では、19 世紀半ばの散文に登場する接続語句 *directly* について考察しています。*Directly* は Charles Dickens、William Thackeray や Matthew Arnold の作品によく現れます。*Directly* は informal 用法が普通となっています。

3 人称単数形活用語尾の場合、*-(e)th* 形と *-(e)s* 形との交代は 18 世紀末までには終了し、また *Doth* と *does* との交代と *hath* と *has* との交代は助動詞用法でも本動詞用法でも 18 世紀末までには終了し現代英語の語形が確立します。時の副詞節を導く接続詞的機能語句も 18 世紀末までには現代英語で使われる語句が揃い、現代英語の基が確立します。従って、最初に述べた仮説は概ね証明できました。